

大阪層群である。大阪層群の露出上端には起伏があり、この層上には中央部附近で洪積層の粘土層が載り、部分的には一メートル近く立ち上る所もある。また南部では一部に埴輪片を含む沖積層が大阪層群に載る区域もある。これらの地層上には全域で崩落堆積層が載っており、現状は営建当初より可成り変形していることが判明した。本調査の出土遺物は埴輪円筒一〇八四片、形象埴輪四片、土師器五片、須恵器一片、古瓦一片、陶磁器七片、計一一一二片である。

六の畝傍山南織沙溪上陵は、墳丘外周の柵設置、溜池内法面護岸等の掘削箇所調査であるが、遺構・遺物は検出されなかった。

元の百舌鳥耳原中陵は構造物の、二の恵我藻伏岡陵は事務所建設時の盛土の掘削に留り、三の百舌鳥耳原中陵も遺物はない。

三の佐保山南陵の調査は、台風の降雨で土砂崩落により石組が露出したので、その実測を行った。露出地点は、陵域内眉間寺跡背後の、墳丘の載る高さ七メートル余の台地急傾斜地の上部で（第一図）、台地平坦部上面下七〇センチ～一三七センチの範囲である。用石は幅三〇～六〇センチ、厚さ一〇～二〇センチの川石で、四段積み四個が露出する。ボーリング探索では西方に延びる。これが墳丘の施設か、眉間寺に関するものかは不明。三の復旧工事で土留柵を設けて埋戻し石組の保存を行った。その折崩落土砂中から石組用石と思われる川石二個と、近世の瓦一五片が出土した。

三～元の調査は、地山露出部と崩落土の調査で、遺構・遺物は検出さ

れず、二の檜隈大内陵崩落部の大半は、拝所構築後の盛土であることが判明した。

三の佐保山東陵では、崩落土の調査で、土師器一三〇片、瓦質土器七片、陶器三片、火葬骨一片、計一四一片を採集した。土師器片は接合するものが可成りあって、中には梵字・名号等の墨書の残る物や、微細な骨片が附着する物があるので、これは中世の庶民の蔵骨器と思われる。

三の越智岡上墓・三の越智岡上陵とも崩落部に遺構は認められず、遺物もない。

以下一及び七の恵我藻伏岡陵、四の深草北陵、七の成菩提院陵、二五の後嵯峨天皇以下三方火葬塚、三の佐保山東陵の各調査について、調査の詳細を掲載し、末尾に前回掲載出来なかった昭和五十六年度調査七の大聖寺宮墓地、同八の伏見宮墓地について調査の詳細を附載する。

（石田茂輔）

恵我藻伏岡陵整備工事箇所の調査

応神天皇恵我藻伏岡陵は、東が高く、西が低い段差のある地に築造された、ほぼ北面する前方後円墳である。墳丘裾をめぐる周濠の外にも、部分的に濠が認められ、周辺の発掘調査によっても、本来は二重濠であったことが確認されている。陵前および西側面の境界沿いは、水路が走り、農業用水や隣接する住宅などからの雑排水により、経年にわたり、

内堤外法裾が侵食され、法面が緩やかに滑落している。そこで、これらの部分に擁壁・外構柵取設その他の工事を行なうことになり、昭和五十七年八月二十三日から九月十五日まで、事前発掘調査を行なった。この間、考古学・地質学および土木工学の専門家の現地検分を願い、それぞれの立場からの指導・助言を賜った。また、昭和五十七年十二月十日から翌年二月十七日までの掘削時には、立会調査を実施した。事前調査を中心に、両者の調査の結果の概要を述べることにする。

事前調査は、内堤外法面に計三十四本のトレンチを設けて発掘した。

内訳は、陵前東側十一本、同西側十四本、西側面に九本である。トレンチは幅一〜二メートル、長さ一〜四メートルとした(第2図)。

調査地は、広大な範囲にわたるため、大きな地形の変化を伴うが、一応、次のように、標準的な層序を考えることができる。

I 層 表土。黒色腐食土。

II 層 二次的な池沼堆積土。内堤外法裾からの浚渫土(II a)、余水吐からの流入堆積土(II b)、および旧水路堆積土(II c)、旧池沼堆積土(II d)と思われるものがある。

III 層 二次的な遺構の埋土(III a)と堤の嵩上げをした盛土(III b)がある。

IV 層 覆土。梅田甲子郎氏から崩落堆積土であるとの教示を得た。礫の含有状態等により数層に分離できる。調査地全域にわたって認められる。

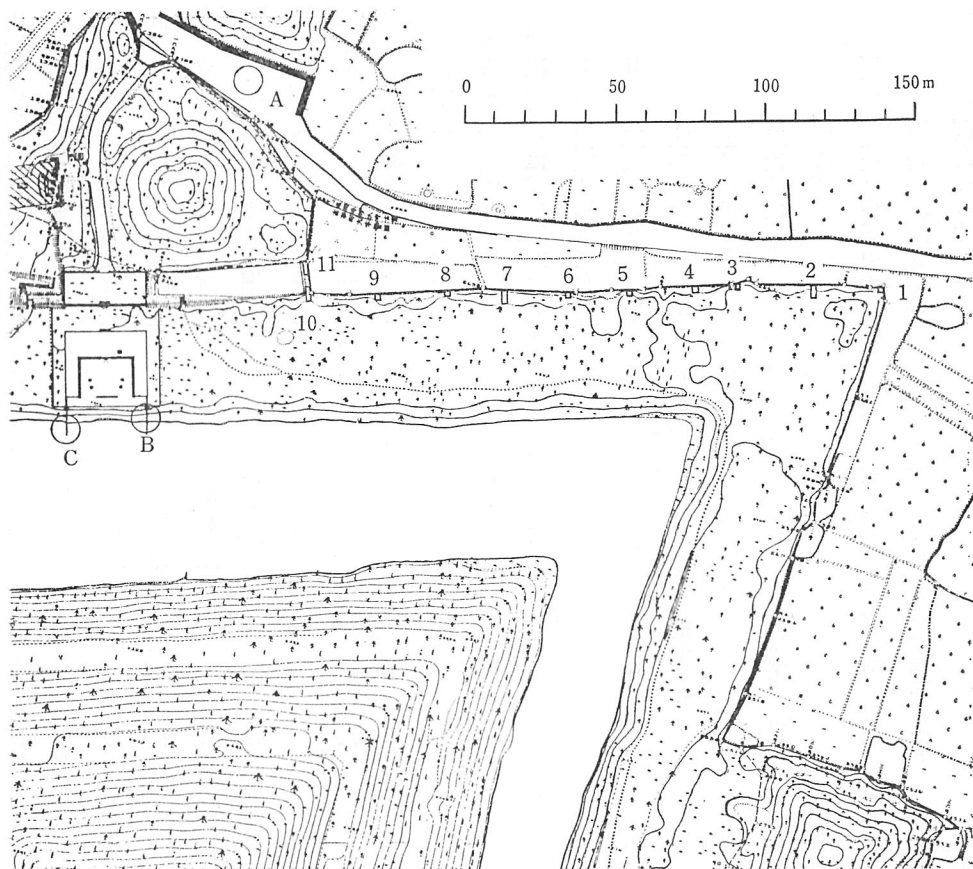
V 層 客土または盛土。古い堤体(渡り土堤)を成すもの(V a)と、泥沼地を埋め立てた際に上位を被覆したと思われるもの(V b)、およびVI層と共に、本来の堤体を構成するもの(V c)がある。

VI 層 地山。東側の1〜10トレンチでは、粗砂層もしくは粘質砂層(VI a)、および砂礫層(VI b)、西側の12〜34トレンチでは、粘土層(VI c)、砂礫層(VI e)、一部に有機物を含む自然堆積層(VI f)を認める。なお、31〜32トレンチでは、VI e層の上位に灰黄色粘質土(VI d)を観察できた。梅田氏から、VI e層は大阪層群、VI b層はその可能性が高い層、VI d層は洪積層である、との教示を受けた。

陵前東側各トレンチの状況

第1トレンチ(第3図1) 調査地の東端に設けた。前方部内堤の東隅にあたる。表土下には、径一〇センチ前後の礫を含んだ砂礫層(IV層)があり、下位に至るにつれ、礫の割合を減じる。IV層の最下層では、再び礫は多くなる。IV層下には、池沼堆積土(II c層)と思われるものが認められる。本来の堤体と考えられるものは、検出されなかった。IV層中より、楕形埴輪、字瓦などが出土した。

第2トレンチ(第3図2) 内堤東隅から西へ約二三メートルのところにあたる。この部分は、上位を除き、本来の堤体の状態を比較的良く、とどめている。つまり、地山である灰黄色砂礫層(VI b層)の内濠寄り



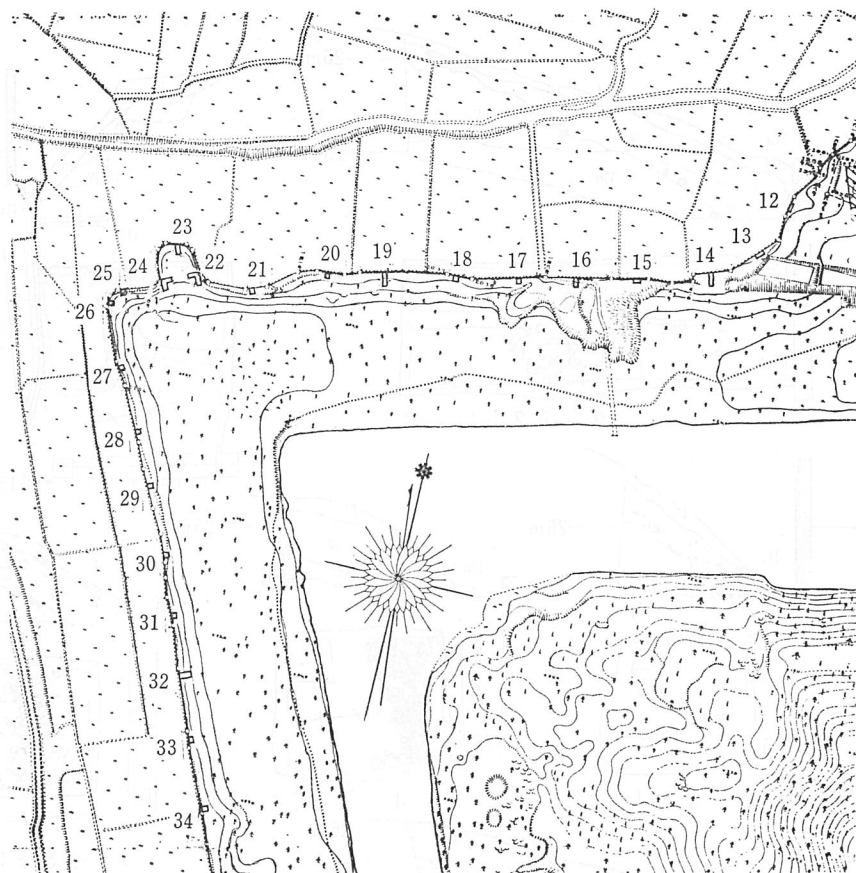
の上面を水平に整形した後、赤褐色砂礫層（Vc層）にて盛土した状態がうかがわれる。この層の上面の礫は、IV層中のものが露呈したものであろう。ただし、本来の葺石の裏込めとして利用された可能性も残されている。IV層中から埴輪、瓦などの破片が検出された。

第3・4トレンチ（第3図3・4） 第3トレンチは、東側内堤が、水路寄りにやや突出している箇所に設けた。第4トレンチは、東隅から約六三メートルのところにあたる。表土下に、黄色砂礫層・黄灰色粘質砂層（IV層）、黄灰色粗砂層（VIa層）がある。また裾寄りの部分には、水路からの浚渫土（IIa層）が認められる。4トレンチでは、IV下層において、一〇センチ前後の礫から成る礫群が検出されたが、3トレンチでは観察されない。地山（VIa層）は、4トレンチでは、水路に対して下向していくのに対し、3トレンチでは、水平に展開している。立会調査時にVIa層を掘り下げたところ、約三〇センチの厚さを有し、茶褐色砂礫層（VIb層）に続くことが明らかになった。埴形埴輪・鍔瓦などが、IV層から出土した。

第5・6トレンチ（第3図5・6） この部分の現堤体は、他に比して表面が削られ、高さを減じている。基本的には、第3・4トレンチと同一の層序を示す。5トレンチで検出された礫群は、やや多くの埴輪片を混じえている。6トレンチでは、

水路寄りに落ち込みがあるが、その落ち込み面に、礫が散在している。
第7トレンチ(第3図7) 陵前東側内堤のほぼ中央に設定した。後世

メートルの断面台形を呈しているが、本来、上部幅約〇・七メートル、下部幅約一・五メートル、高さ約〇・五メートルの畦状の地形をなして

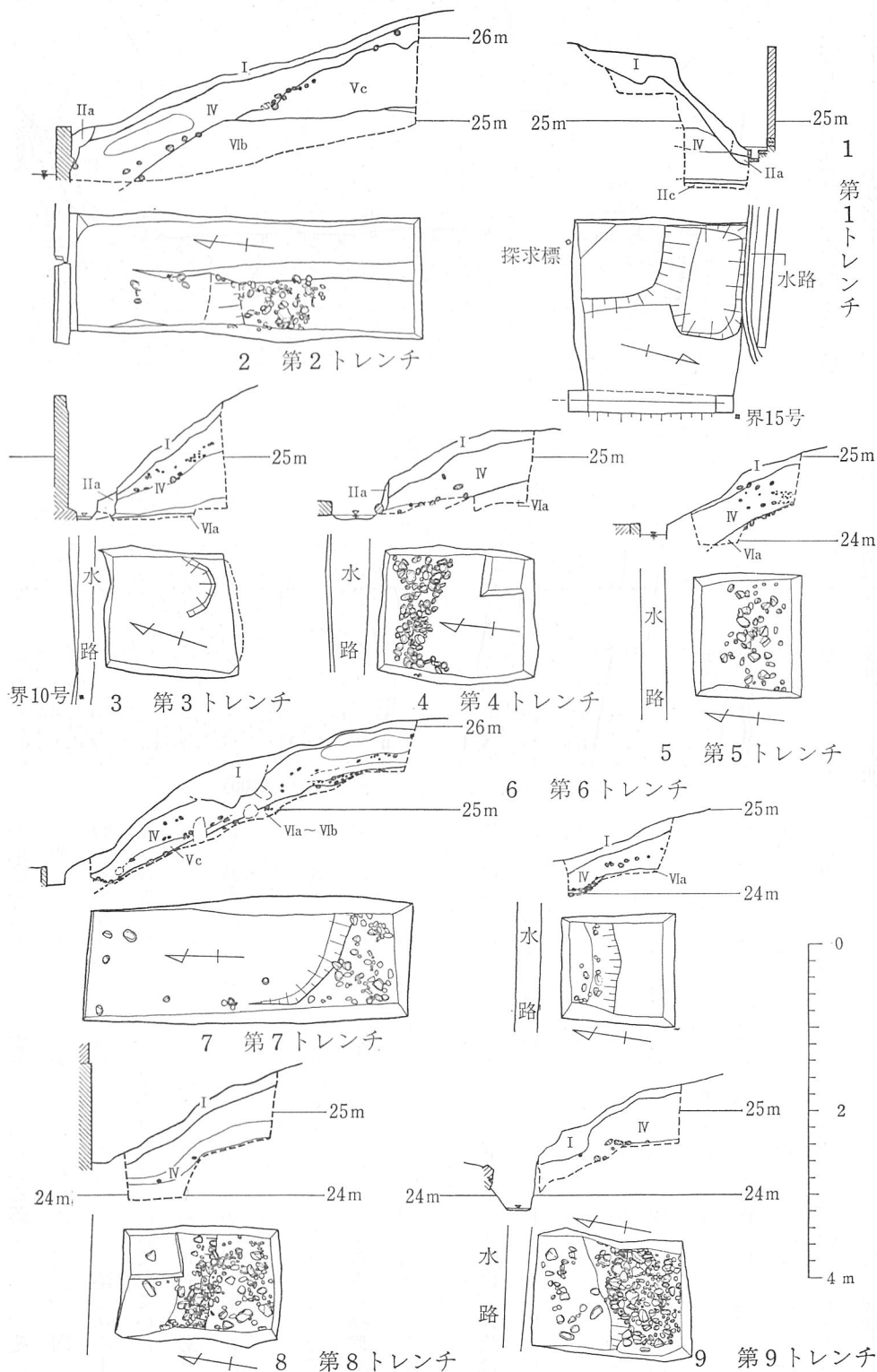


第2図 恵我藻伏岡陵調査箇所的位置 (1/2500)

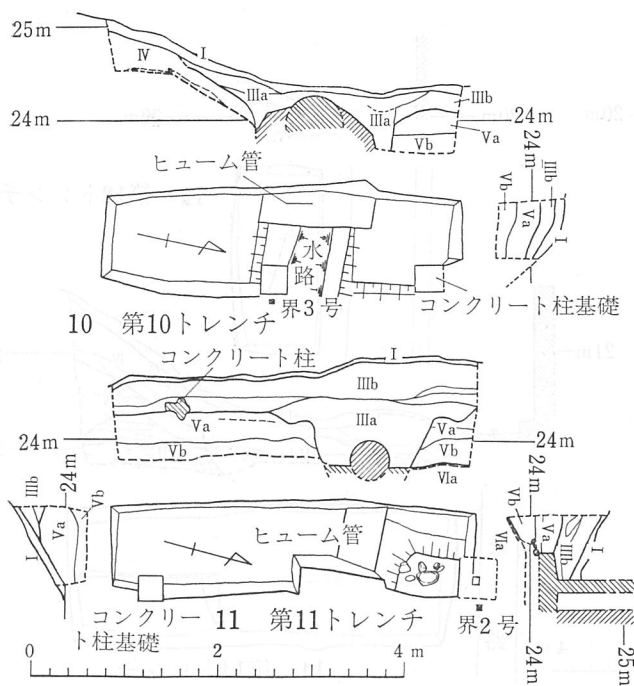
の攪乱が著しい。内濠寄りで認められる落ち込みも、その一つであろう。本来の堤体を成したと思われる褐色粗砂層(Vc層)もかなり削られ、葺石をとどめていない。落ち込み上位の平坦な面で検出された礫群も、砂礫層中に含まれていたものであろう。地山は、上位に薄い褐色粗砂層(Via層)があり、灰黄色砂礫層(VIb層)へと続く。IV層中から、埴輪・瓦などが出土しているが、量的には少ない。

第8・9トレンチ(第3図8・9) 表土下の黄色砂礫層(IV層)の下位に、径五〜二〇センチの礫から成る礫群が検出された。相互に有機的な関連は認められず、また、周囲の土も締りが無い。出土地点のレベル差も数一〇センチある。立会調査時にさらに掘り下げたところ、8トレンチでは、IV層はさらに約三〇センチの厚さを有し、地山たる粘質砂層(Via層)へ続くことが確かめられた。IV層中から埴輪片などが出土した。

第10・11トレンチ(第4図10・11) 陵前東側約七〇メートルのところに、内堤と陪冢丸山古墳とを繋ぐ渡り土堤がある。その内堤と外堤接合部の東側に設けたトレンチである。渡り土堤は、昭和四十七年度の盛土工事により西側に拡張されて、現在、上部幅約三メートル、下部幅約七メートル、高さ約一・三



第3図 恵我藁伏岡陵トレンチ平面および断面(1) (1/80)



第4図 恵我藻伏岡陵トレンチ平面および断面(2) (1/80)

いた。今回の調査でも、これらを裏付けることができた。10トレンチは、昭和四十七年度に、樋管を改修した際に埋設したヒューム管の埋土(III a層)とそれに伴うと思われる盛土(III b層)が多くを占めている。灰褐色粘質土(V a層)は、上位が黒色を帯びており、昭和四十七年度当時の旧地表と考えられる。灰色粘質土(V b層)は、付近の畑土と同質である。11トレンチでは、この層の中央北寄りに幅約一・五メートルの

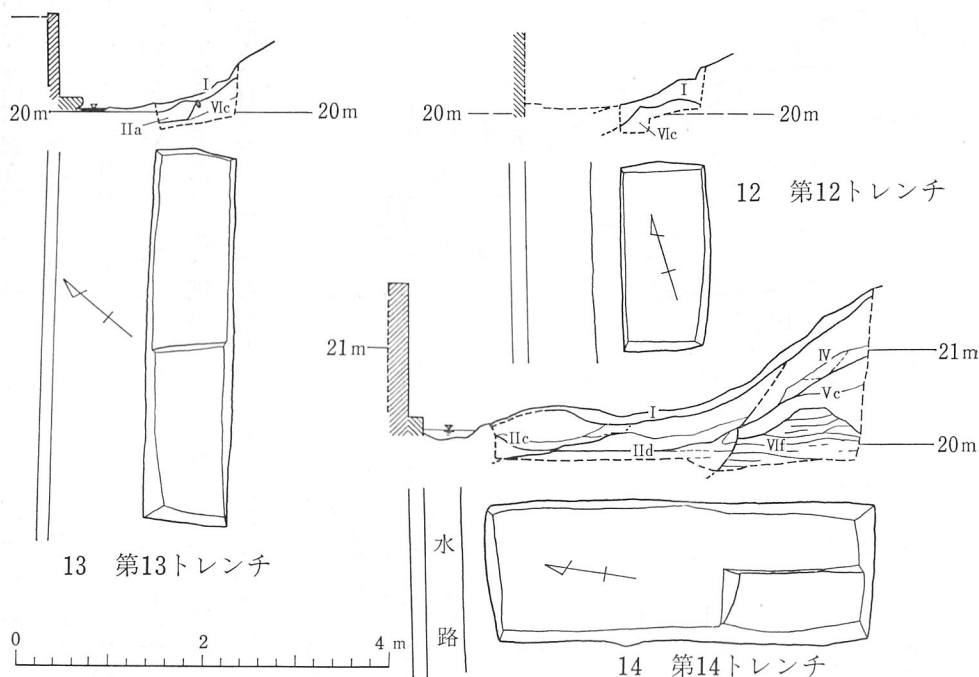
溝状遺構が認められるが、中央をヒューム管埋設溝により切断されており、その性格は不明である。また、V a層とV b層との間で認められた数個の石は、コンクリート柱の基礎の栗石であろう。10トレンチの内濠寄りのほうでは、IV層の下部で礫群に混じって、多くの埴輪片が出土した。11トレンチの出土遺物は極めて少ない。

以上の陵前東側1～11トレンチにおける所見をまとめると、次のようになる。

表土層の下には、厚さ数一〇センチの崩落堆積土(IV層)があり、埴輪片、瓦片、円礫などを含んでいる。その下に旧堤体があり、盛土層及び地山から成る。地山は、2トレンチで認められるが如く、本来は中途から水平に整形し、盛土し易いように工夫したのであろう。旧堤体の外面は変異が著しく、葺石は既に失なわれていたと考えられる。葺石もしくはその裏込めかとも疑われる礫群をいくつか認めたが、これらは上下のレベル差も大きく、営建時の葺石と断定できるものではなかった。

陵前西側各トレンチの状況

第12・13トレンチ(第5図12・13) 陵域は拝所の前面で、三角形に張り出している。その北西側の境界沿いに、12・13トレンチを設けた。前者は、内堤外法裾から約二三メートルのところに、後者は、陵域内にその痕跡をとどめている外濠が西側にのびる部分にほぼあたる。ともに表土下一〇～二〇センチで、粘質砂層に至る。おそらくVI層の一枚ではなからうか。若干の埴輪片が出土している。



第5図 恵我藻伏岡陵トレンチ平面および断面(3) (1/80)

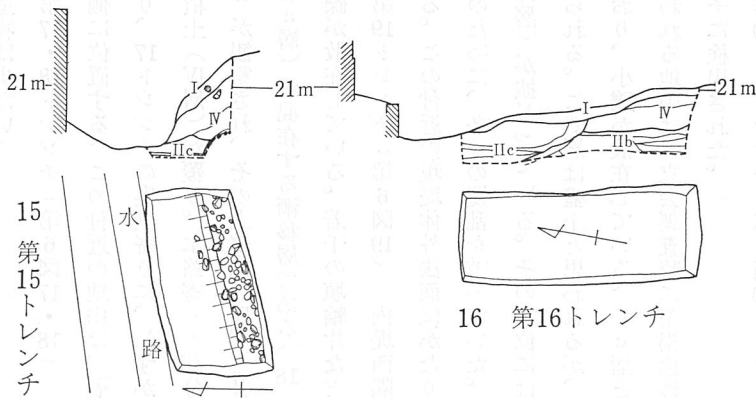
第14トレンチ(第5図14) 本トレンチは、内堤西隅から約一九五メートルのところに設定した。水路寄りの平坦面は、湿地状の地形をなしており、本来の外濠の一部にあたると思われる。この部分の堤体は、水底において自然堆積した層と考えられる、粘土層・有機質黒色土層および砂層から成る固く締った土相(VI f層)と粘土層(Vc層)である。VI f層上面は、内濠方向への傾斜面をもつ。つまり、堤体とは逆の勾配面を有し、その上に盛土を行なっている。安定した盛土作業をするための配慮であろう。その後、この堤体の裾は大きく扶られ、有機質分を含むやや軟質の茶褐色土(II d下層)が堆積している。内濠寄りの堤体は、II d下層の堆積後、再び大きくカットを受けている。崩落堆積土(IV層)が、調査地を覆った後に、再度、有機物を含んだ茶褐色粘質土(II d上層)が堆積している。その後、該地は溝となり、数次にわたり、池沼堆積土で覆われ、その度に溝の幅を狭め、現在の水路と化したと思われる。IV層中などより、若干の埴輪片が出土した。

第15トレンチ(第6図15) 内堤西側のほぼ中央には、内濠からのびる余水吐があり、これによって裾部は大きく削られている。この部分に四箇所のトレンチを設けた。本トレンチは、その東端に位置する。層序は、基本的には、14トレンチと同様である。つまり、礫群を上部にとどめる灰色粘質土(IV下層)の水路寄りの部分に旧水路と思われるII c層が観察される。その上位を再度、黄色粘質土・黄灰色粘質土(IV上層)が覆っている。盛土層・地山は検出されていない。立会調査時に、この

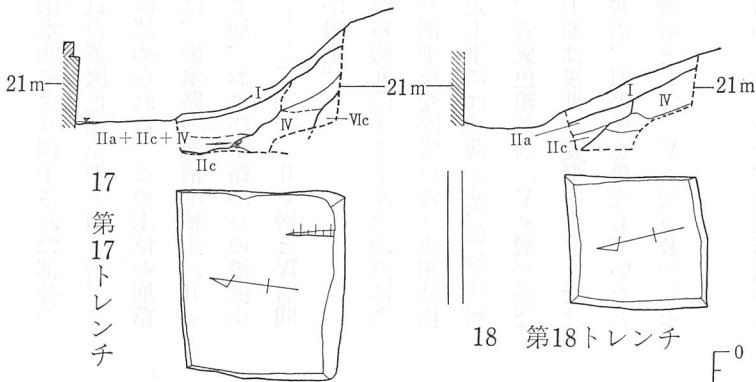
礫群は、本トレンチの東方約一・四メートル、西方約一・八メートルにわたって拡がっているのが、確認されている。埴輪・瓦片などがIV層から出土した。

第16トレンチ (第6図16)

余水吐の流出口付近に設けた。内濠寄り

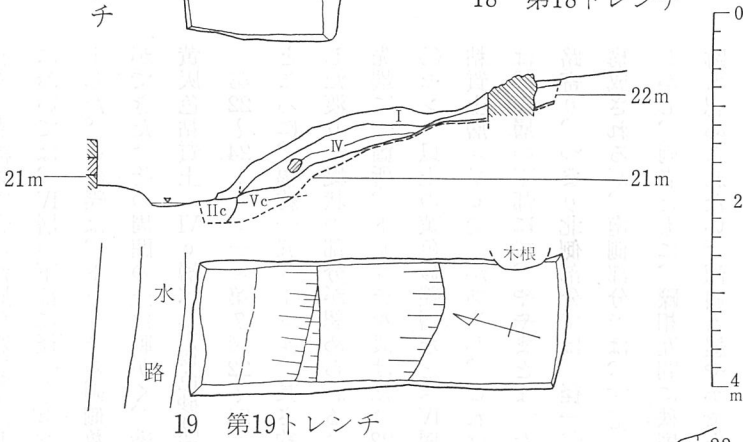


16 第16トレンチ

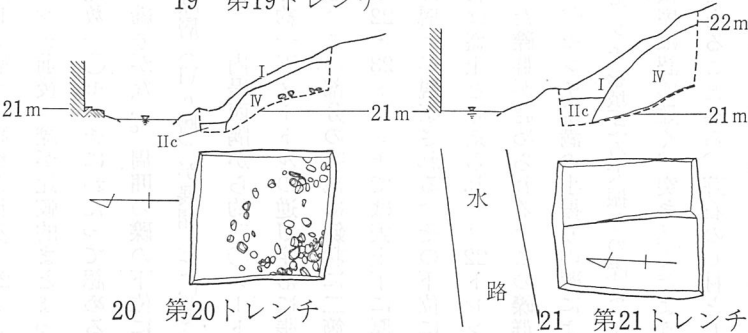


17 第17トレンチ

18 第18トレンチ



19 第19トレンチ



20 第20トレンチ

21 第21トレンチ

第6図 恵我藻伏岡陵トレンチ平面および断面(4) (1/80)

に、余水吐からの堆積土(IIb層)が、互層を成しているのが知られる。IIb層の下部には、泥炭層も認められる。IIb層は、上位を黄色砂礫層、および灰色粘土層から構成される崩落堆積土(IV層)にて覆われている。また、水路寄りには、旧水路の池沼堆積土(IIc層)が観察される。出

土遺物は少ない。

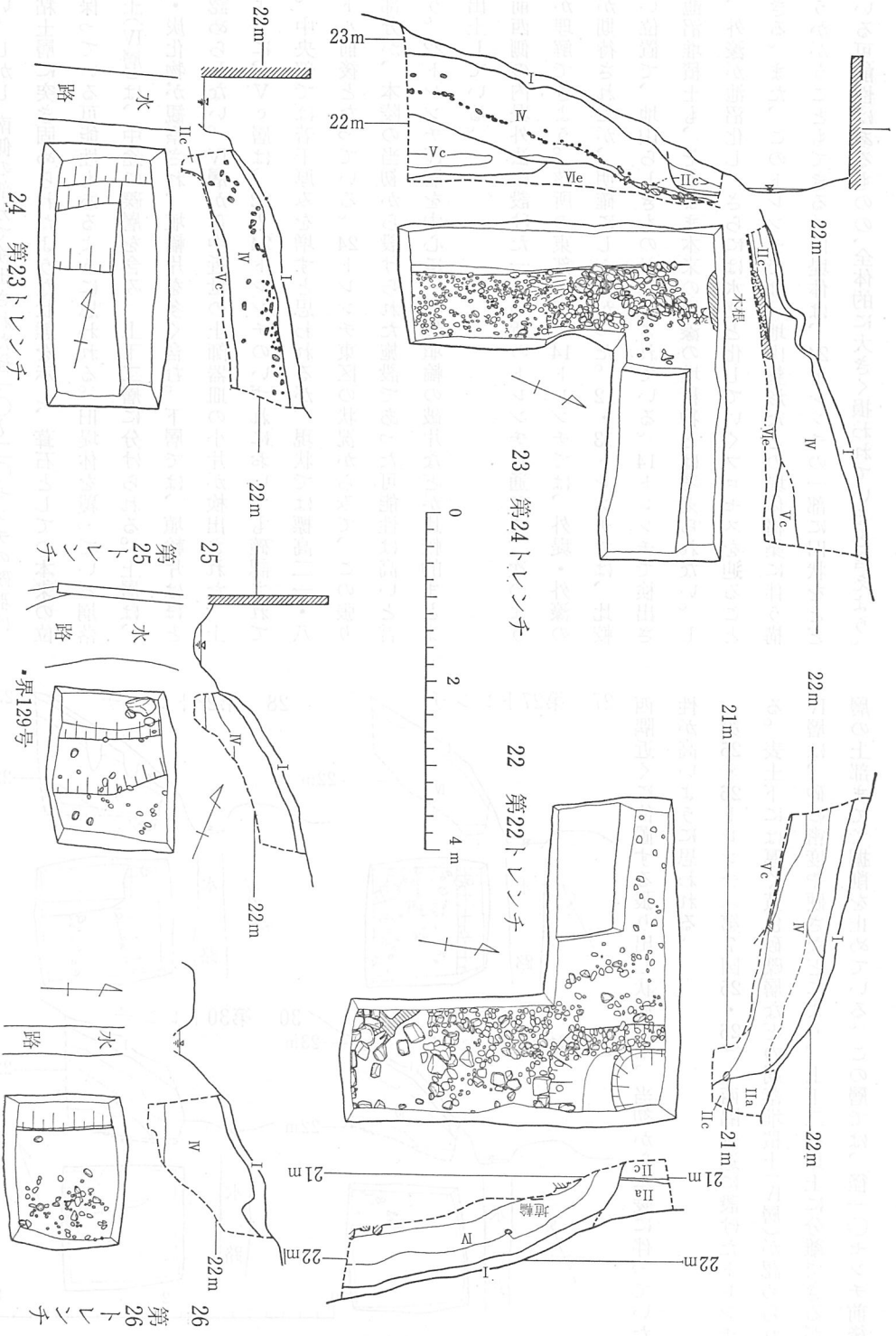
第17・18トレンチ(第6図17・18) 余水吐により削平された部分の西側に位置する。この付近の地山は、硬質の黄灰色粘土層(VI c層)であり、17トレンチの奥壁寄りに、わずかに認められる。この上位を崩落堆積土(IV層)が覆う。水路寄りの部分は、旧水路の池沼堆積土(II c層)が観察され、その上位は、IV層とII c層、および水路からの浚渫土(II a層)が混在する漸移層である。18トレンチでは、II c層とIV層間に礫が散在している。若干の埴輪片などが出土。

第19トレンチ(第6図19) 内堤西隅から約九〇メートルの地点にあたる。この付近の現堤体外法面はかなりの削平を受けている。土相は松根のために、多くの攪乱を被っていた。表上下には、薄く黄色砂礫層(IV層)が拡がっている。その下位には、青灰色粗砂層(V c層)が認められる。この層は盛土と思われるが、上面は後世の変形を大きく受けており、小礫が散在している。V c層と共に、旧堤体を構成していたと思われる地山は、立会調査時に茶褐色砂礫層として、V c層下数一〇センチに検出された。

第20・21トレンチ(第6図20・21) 第20トレンチは、内堤西隅から約七五メートルのところに、第21トレンチは約五〇メートルのところに設けた。21トレンチを中心とした部分の内堤は削平され、痩せているのが注意される。土相は、両者ともに相似た状況を示す。つまり、表土下には、黄色砂礫層(IV層)が認められ、水路寄りの部分に、旧水路と思わ

れる、有機物を含んだ灰色粘質土(II c層)が観察される。20トレンチにおいては、IV層の下部に径一〇センチ前後の礫が比較的まとまって出土した。この礫は、トレンチの両側数一〇センチにわたって認めることができた。その周囲の土は軟かく、締りが無い。周囲の礫の下位には、黄灰色粘質土(VI c層)、茶褐色砂礫層(VI e層)が展開している。

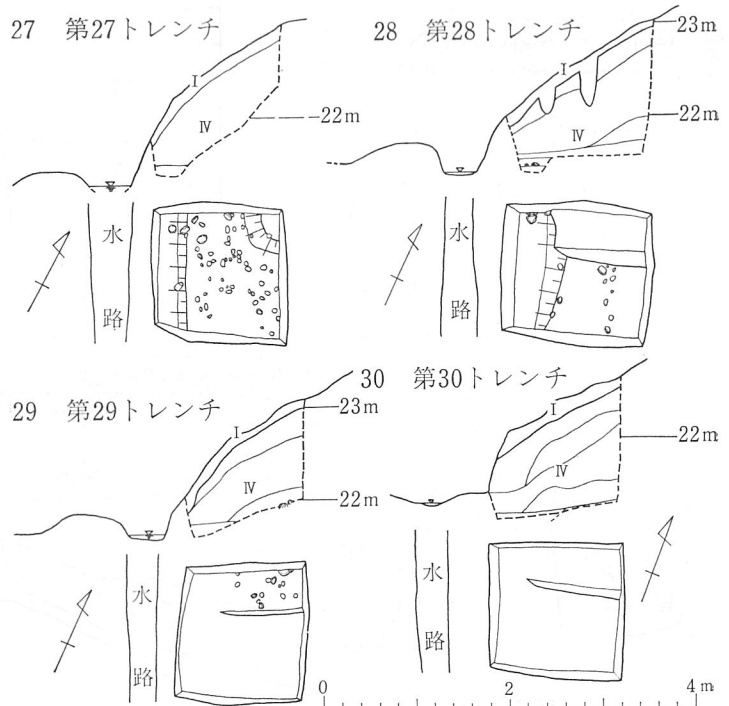
第22・24トレンチ(第7図22・24) 内堤西隅から約二〇メートルのところに、幅約一五メートル、長さ約一五メートルの逆U字形に張り出した渡り土堤状の部分が認められる。この部分の基部に鍵状に二箇所、先端に一箇所、トレンチを設けた。22・23トレンチでは表土下に厚さ五〇センチ以上の黄色砂礫層など(IV層)が観察される。その下位には、粘質土層(V c層)があるが、これは盛土と考えられる。22トレンチでは、IV層の下部にて、ややまとまった礫群が認められる。この礫群は水路寄り、つまり北側部分では、径一〇センチ未満の小振りの礫によって構成されるが、南側部分では、二〇センチを超える大振りの礫より成る。しかし、両者ともに、礫相互間に秩序は認め難く、突き込んだような痕跡も認められない。傾斜も緩やかであることから、葦石の石材として利用された可能性はあっても、葦石として原位置を保つかどうかは疑問である。一方、24トレンチは、旧堤体の構造を比較的良くとどめていると言える。その構造は、前述の2・14トレンチの状況に近い。つまり、地山上面がわずかながら内濠寄りの傾斜面を有し、その上位に盛土されているのである。旧堤体の外法面は削平され、葦石はほとんどとどめて



第7図 恵我藻伏岡陵トレンチ平面および断面(5) (1/80)

いない。しかし、南側の部分で検出された径一〇～二〇センチの礫群は、灰色粘土層に突き固められたような状態を示し、葦石としての本来の位置を保っている可能性もあるように思われる。旧堤体を覆っている崩落堆積土(IV層)は、中途に礫層を含み、上下二層に分けられる。上層は、焼土・炭化物が観察され、埴輪片を多く含む。下層では、埴輪片はほとんど認められない。IV層から中近世の土師器皿の小片が検出された。上述のように、Vc層は、22～24トレンチのいずれにおいても確認されている。中央部では若干厚みを増すと思われるが、現状では標高二一・八メートル前後となっている。24トレンチ東区の状態からみて、この張り出し部分が、本陵の当初から設けられた施設であった可能性は高いと言えよう。22トレンチIV層を中心に、楕形埴輪の破片などが比較的まとまって出土している。

陵前西側の内堤外法に設けた一三ヵ所のトレンチを通じて、次のような点が理解できよう。該所の東部、12～14トレンチでは、外堤・外濠の検出が期待されたが、明確にしえなかった。12・13トレンチでは、比較的浅い位置で、地山らしきものが確認されている。14トレンチで検出された池沼堆積土も、そのまま本来の周濠の堆積物とは考えられない。しかし、外濠が池沼化し、さらには水路と化していくプロセスを辿ることができる。また、このトレンチでは、地山整形などの堤体構築に伴う構造をうかがうこともできる。旧堤体は、24トレンチの一部に旧状をとどめている可能性はあるものの、全体的に大きく損われていると言えよう。



第8図 恵我藻伏岡陵トレンチ平面および断面(6) (1/80)

西隅近くに位置する張り出し状施設は、当初から本陵に伴っていた可能性が高いように思われる。

第25・26トレンチ(第7図25・26) 西隅付近に設けたトレンチである。表土下には厚く黄色砂礫層などの崩落堆積土(IV層)が認められる。IV層は、砂の密度や硬さなどにより、上下二層以上に分離できるが、下層の上部までで掘削を止めている。この層では、径一〇センチ前後の礫

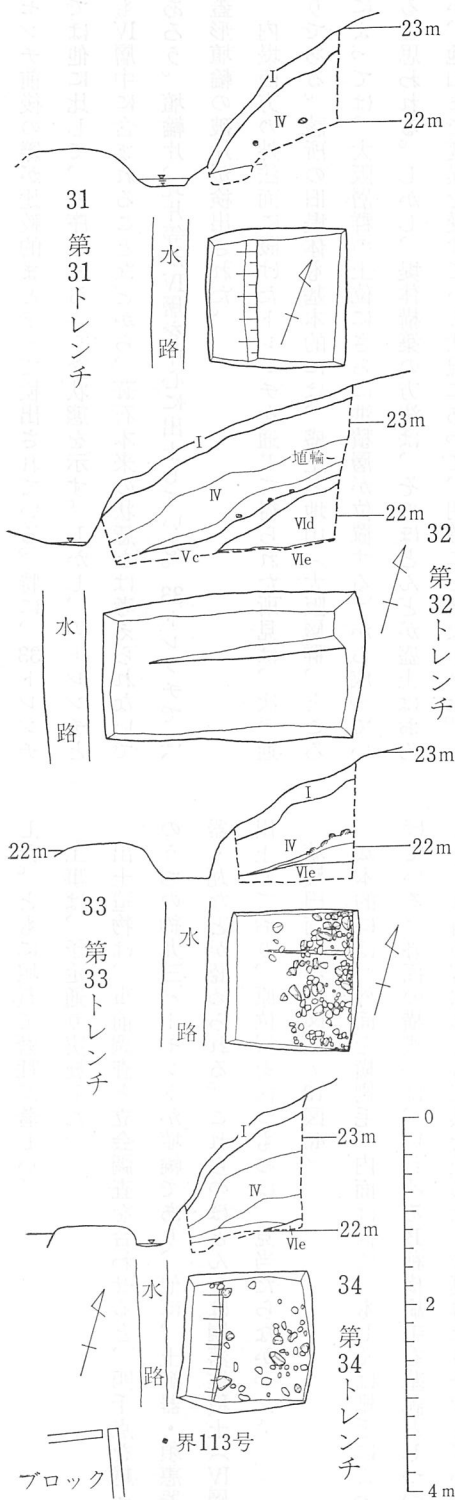
が散在して検出された。25トレンチでは、黄灰色粘質土（IV下層）から径三〇センチを越す礫が一個出土した。埴輪片、瓦片などが出土している。

内堤西方の外法面の各トレンチの状況

第27トレンチ（第8図27ト） 27トレンチから34トレンチは、前方部内堤西方の外法面に二〇数メートルの間隔をあけて設けた。27トレンチの土相は、前述の25・26トレンチに類似している。ただし、礫が比較的まとまって出土したのは、27トレンチのみである。28トレンチを中心に述べてみたい。表土下には、数層に細分できる崩落堆積土（IV層）がある。その最上層は黒灰色を呈し、締りも悪い。おそらくは、近年の崩落土であろう。立会調査時の所見によると、掘削床面下三〇

四〇センチで、地山である砂礫層（VIe層）を確認することができる。両者の間には、盛土と思われるものが認められなかったところから、この地山も、かなり削平されていると見てよからう。主にIV層から埴輪片・土師器片などが出土。

第31トレンチ（第9図31ト） 34トレンチは、内堤西隅の南約一七〇メートルの地点にあたる。基本的な層序は、27トレンチに類似している。32トレンチでは、盛土として茶灰色粗砂層（Vc層）を認めることができたが、その上部は、大きく変異を受けている。32トレンチの地山は、洪積層（VI d層）、および大阪層群（VI e層）から成っている。洪積層は、立会調査時の所見も合わせれば、31トレンチとその周辺にかけて確かめられるようである。33・34トレンチでは、径一〇



第9図 恵我藻伏岡陵トレンチ平面および断面(7) (1/80)

センチ前後の礫が比較的まとまって検出されている。特に、33トレンチでは他に比して、秩序があるような状態を示す。しかし、両トレンチともIV層中に含まれることから、葦石本来の状態とは考えられないであろう。埴輪片、瓦片等がIV層を中心に出土している。33トレンチでは、蓋形埴輪の破片が検出された。

内堤西方の外法面に設けたトレンチを通じて得られた所見は、次の通りである。該所の旧堤体も基本的には、盛土と地山（大阪層群、ところによっては、大阪層群の上位にさらに洪積層が位置する）から成っていると思われる。しかし、堤体構築の方法は、そのほとんどが盛土はおろか、地山まで変異を受けている状況にあって、明確にしえなかった。

以上のように、今回の調査地に設けたトレンチのいくつかを通じて、旧堤体の内部構造の一部を明らかにし、また一部ながらも葦石などの堤体表面が遺存されている可能性を見出したものの、調査全体を通じて明らかにしえた点は少なかった。

施工にあたっては、葦石の可能性のあるものを始め、その蓋然性のある礫群を保存するように設計変更し、その上で、実施した。

これらの内堤外法部分のほかに、第2図Aに示した、陪冢丸山古墳と史跡大鳥塚古墳の間の駐車場整備箇所（深さ二〇センチ）、B・Cの、坪所の内濠に面する内堤内法裾の石柵補修箇所（深さ六五センチ）についても、掘削に伴う立会調査を行なった。いずれも近年、工事の際に手を加えた箇所の再掘削である。Bでは、攪乱土の中から、埴輪二点が出土

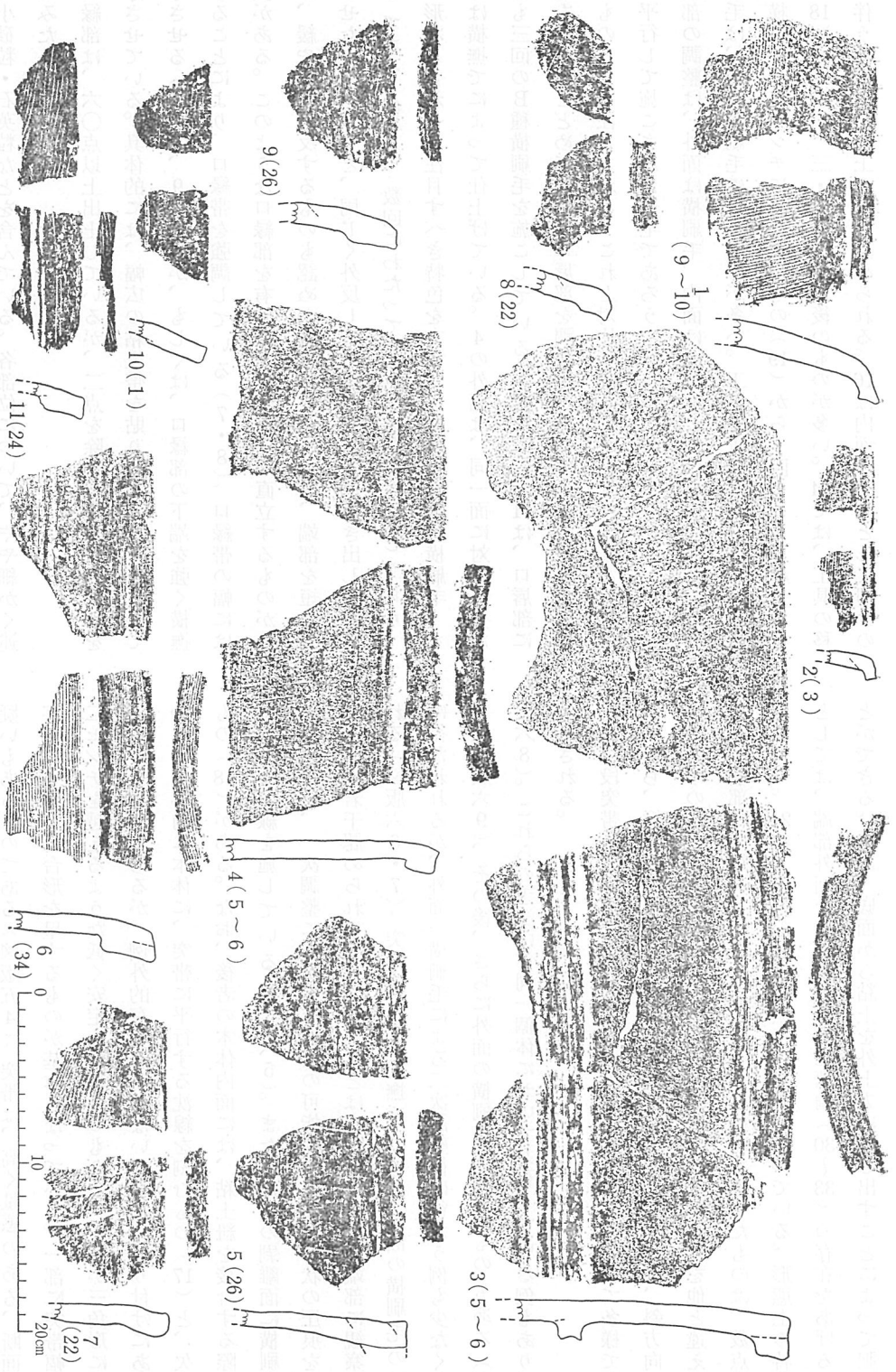
した。ともに埴質で磨耗が著しい。

工事は、予定通り実施した。

出土遺物は、事前調査と立会調査を合わせると、四千点を越える。そのうちの約九三パーセントが埴輪であり、他に、土師器・須恵器・陶磁器・瓦などが認められる。これらのほとんどは崩落堆積土（IV層）から出土しており、原位置を保つものは、見当たらなかった。

埴輪円筒（第10図1～13図40）

基本的には、外面を横刷毛、内面は無で、もしくは刷毛によって仕上げている。外面の横刷毛は、いわゆるB種横刷毛を基調としつつも、縦もしくは斜め方向に遺る工具を止めた際の痕跡たる条線を伴わない横刷毛も少なくない。これらの刷毛目の中には、一見、撫でと見違えるような極めて細かい刷毛目が多く認められ（図版五1～3）、後述する口縁部の形状と共に、本陵出土品の大きな特徴となっている。口径は四〇～五〇センチ、底径三七～四五センチに還元されるような大形の製品が多い。もつとも小破片が多いため、この法量内におさまらない製品も多々あると思われる。突帯間の計測が可能なものは数点しかないが、一〇～一一センチを測る。突帯の数については不明である。透し孔は全て円形を示す。焼成は、赤褐色系の色調を呈する埴質のもの、堅緻な焼成の須恵質のもの、および両者の中間的な焼成を示すものがある。その出土比率は、小片が多いため、一概には言えないが、現状では埴質のものが若干多い。赤色塗布を行なった例もある。黒斑は認められない。胎土は多



第10図 恵我漢伏岡陵の出土品(1) (1/4)

()内数字は出土トレンチ名を示す。

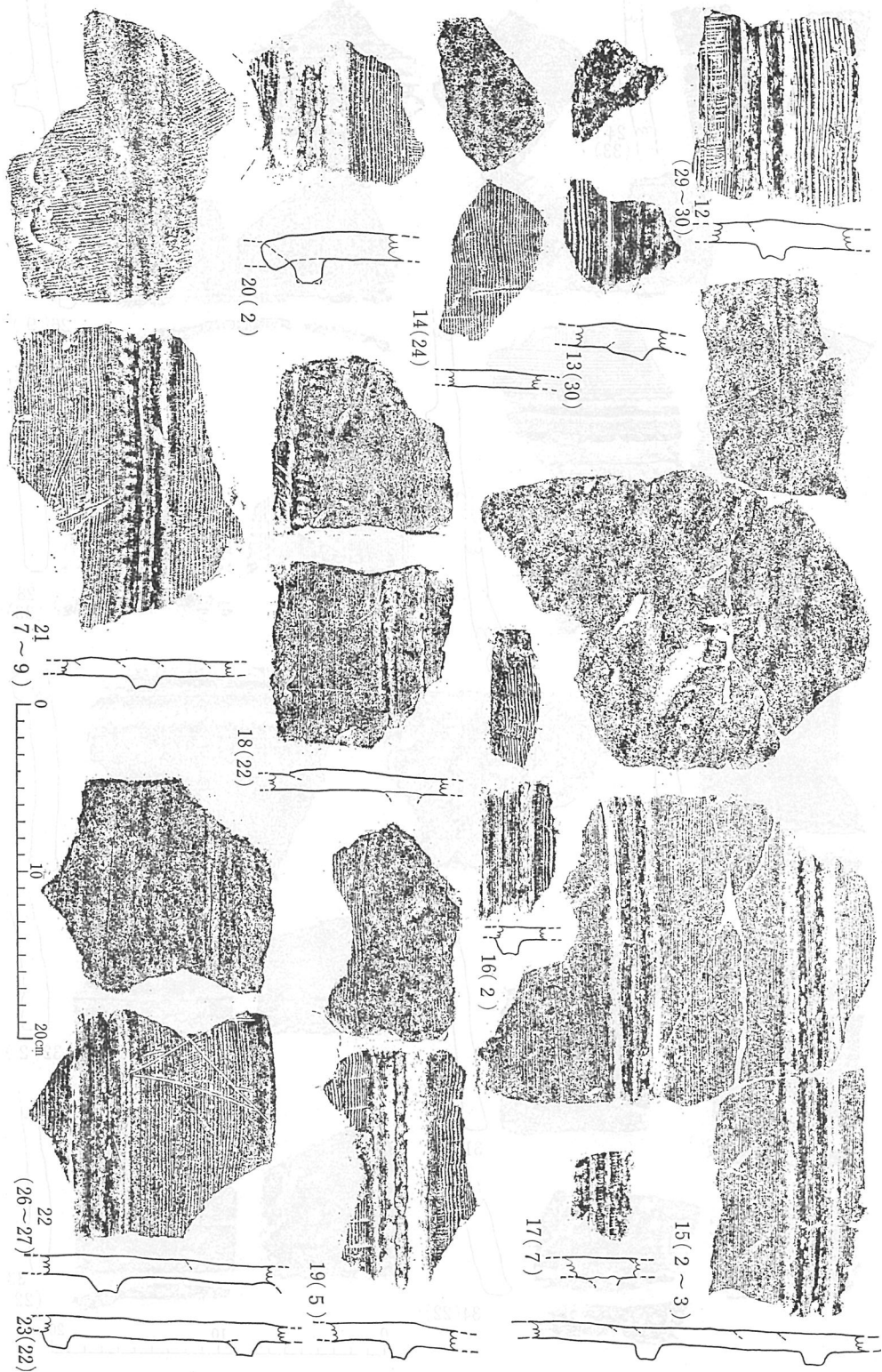
くの小砂粒・石英粒などを含んでいる。各部位について、やや細かく述べてみたい。

口縁部は、六〇点以上出土しているが、二点を除き、全て、口縁部を肥厚させている。具体的には、幅広の粘土帯を貼り付けることによって肥厚させる（3・6、9・11）か、もしくは、口縁部の下端を強く横撫ですることにより、口縁部を強調している（7・8）。口縁部の幅には広狭がある。このような口縁部を有するものは、ほぼ直立するものが多いが、緩やかに外反するものも認められる。他の二点は、端部を短く外反させたもの（2）と、同じく外反して、端部を上下にひき出したもの（1）である。後者は、数回にわたって、外面に縦刷毛を施しており、その形状と合わせて注目すべき特色を有す。口縁部外面は、横刷毛、もしくは横撫でによって仕上げている。4の外面は、同一面に対して少なくとも三回のB種横刷毛を施している（図版五3）。11は、口唇部に刷毛を波状にとどめており、口唇部を調整する際の工人との位置関係を示すものとして注目される。これと対比されるのが、6のような、口唇部に平行して施こされた刷毛であろう。

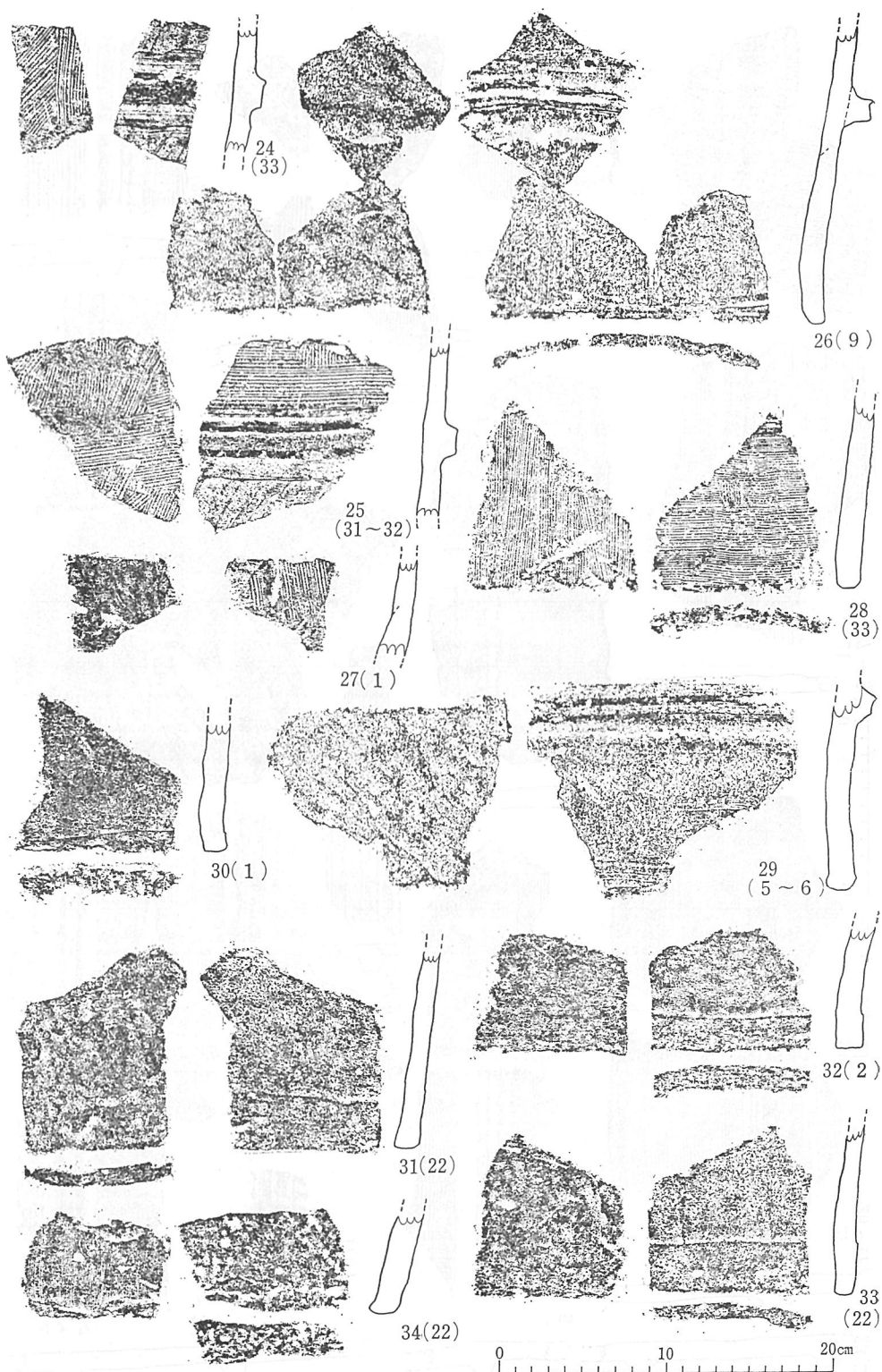
胴部の調整は、外面は横刷毛、内面は撫でもしくは刷毛である。外面の刷毛は、B種横刷毛によるものが多い。工具を止めた際の痕跡たる条線の横幅は、二センチに満たないもの（19）から、四センチを越えるもの（18）まである。三・五センチ前後のものが多い。14では、工具の移動に伴う粘土の盛り上がりが認められる。16は内面の調整として叩きの

疑いもあるものである（図版五4）。突帯は、高く量感のある、断面M字形、もしくは台形を呈するものが基本となっている。一部に突帯幅が二センチを越えるような低く安定した形状のものや、断面が三角形に近いもの（13）があるが、例外的存在でしかない。突帯の貼り付けにあたっては、事前に本体に、突帯に平行する沈線を刻むもの（17）と、欠くもの（18）がある。なお、後者の本体内面には、粘土紐を接合する際に斜方向の刻線を施している（図版六5）。また、突帯の剥離面に横刷毛が認められ、一次調整に縦刷毛末使用の可能性がある。布状の圧痕を有する例も若干認められる。そのほとんどは、突帯の側面の端部に観察される（図版六6・7）。突帯の上下の横撫では、多く外面の横刷毛の前行なわれるが、外面の横刷毛による二次調整後に行なう例も少なくな（図版六9）、その後、さらに外面の横刷毛を加えるものもある（図版六8）。これらの手法は、同一個体において共存している例もあり、注目される。

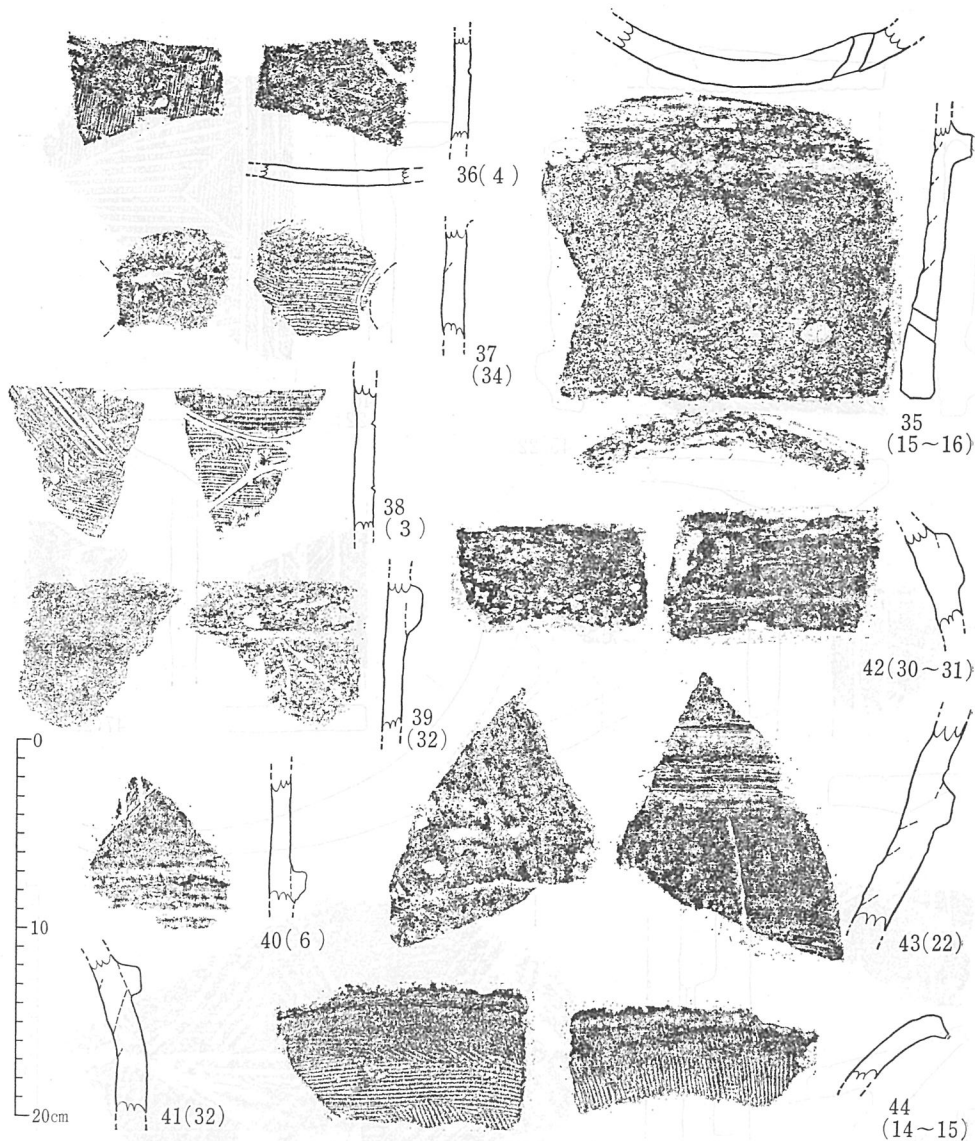
最下段突帯から底部にかけての外面の調整は、胴部に比して多様である。則ち、縦刷毛によるもの（26・27）、横刷毛のもの（28）、斜方向の撫で付けのもの（24・25）などがある。27は、胎土・色調を他と違えており、胴部の破片の可能性もあろう。撫で付けを施したものは、数点認められる。24は、上位の段にも撫で付けを行なっている。形態上の特色としては、端部外面を若干肥厚させた埴輪（30・33）の存在をあげることができる。30は、底面から粘土を外上方に押し出すことによって肥厚



第11図 恵我源伏岡陵の出土品② (1/4)



第12図 恵我藻伏岡陵の出土品(3) (1/4)

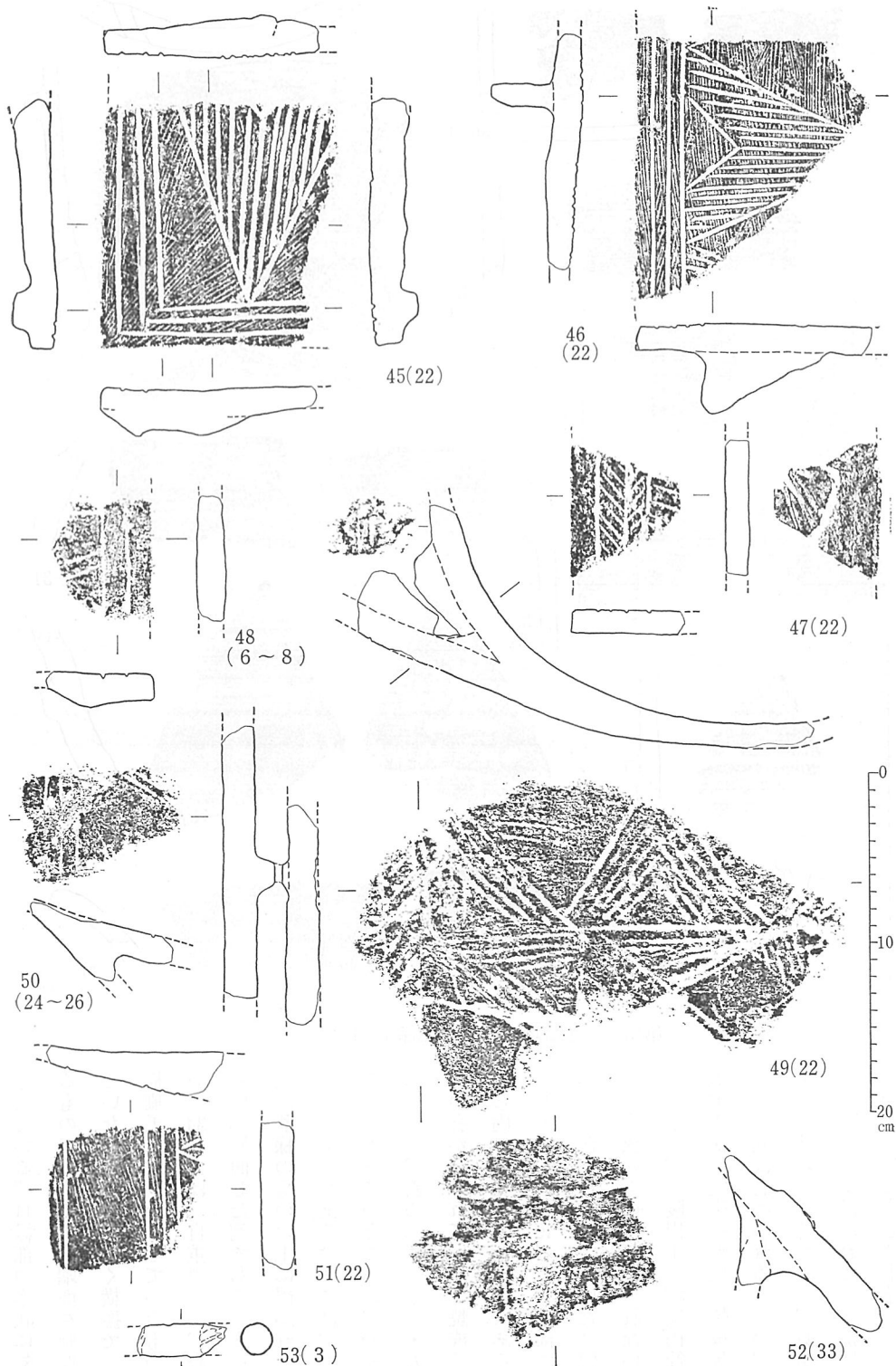


第13図 恵我藻伏岡陵の出土品(4) (1/4)

させている。口縁部の形状に対応するものであろうか。端面を肥厚させていないものは、強く横撫で(26)、横刷毛(29)を施しているものが多い。34などは、自重のため、底面が内側へ屈曲した例である。また、底面に蕃様のものの上に置かれた痕跡をもつものもある。35には、底面から約三センチのところに、やや上位に向けて、斜めに径一・五センチの孔が穿たれている。焼成前に外から内に穿孔されたものである。

21・22、36・40として胴部に刻線を施した例をあげておいた。同一の文様構成のものは認められない。

つまり、本陵出土の埴輪円筒は、調整手法や突帯の形状、焼成等に若干の差異は認められるものの、口縁部の形状などに関しては、見事なまでに画一化が計られており、作りも、比較的丁寧である。本誌前号および



第14図 恵我藻伏岡陵の出土品(5) (1/4)

前々号で報告した白鳥陵出土品などに比して、大きな特徴と言えよう。

朝顔形埴輪（第13図41～44）

口縁部（44）は大きく外反し、端部を下方にひき出した形態のものである。他は、胴部から花芯部に向かう肩部（41・42）と頸部（43）の破片である。肩部の突帯は、形状に差がある。43は厚手の製品で、胎土などに他とは異なった特色を有す。

形象埴輪（第14図49～53）

楯や蓋などを象った器財埴輪が出土している。そのほとんどは、楯形埴輪である。赤色の塗布を行なった例もある。須恵質のものは認められない。

楯形埴輪（45～51）は、49を除き、天地左右を明確にしない。実測図に示したような位置にて説明を加えたい。45・46は、表面を粗い刷毛にて調整した後、側縁に三条の平行沈線に沿わせ、内側に鋸歯文を刻している。ただし、45では、鋸歯文が外向きに表現されているのに対し、46では内側に向かっている。45の裏面は、指撫のため、凹凸が著しく、下縁に沿って、最大高一・五センチ、幅一・五～二センチ、長さ九センチの長耳状の突起を貼り付けている。46にも、側縁に直交する高三・五センチ、幅一・五センチ、長さ八センチの直角三角形の突起を貼付する。その意図を明確にしないが、側縁を補強するための処置であらうか。47では、側縁に沿う綾杉文が認められる。49・50は、円筒部と粘土板との関係を知ることのできる資料である。49では、円筒部と粘土板を接合

した後、円筒に接する部分の空隙に別の粘土を充填し、さらに補強のため、部分的に幅約一・五センチの三角形の粘土板を挟み込む。表面には、鋸歯文・綾杉文などが刻されている。鋸歯文の内側の充填の仕方が、45・46とは異なっていることは注意しておくべきであらう。

蓋形埴輪は、可能性のあるものを含めると二点出土している。52は笠部の中央部付近の破片である。扁平な突帯を繞らし、直交する沈線が認められるが、磨耗のため、一条しか確認できない。基台部と笠部の接合にあたっては、接合部に粘土を充て、補強を計っている。

53は、径一・八センチ、現長五センチを測る。磨耗が著しい。反りは、あまり認められない。堅魚木であらうか。

弥生土器

外面に粗い叩き、内面に刷毛をとどめた、V様式の甕の小片がある。

土師器（第15図54・55）

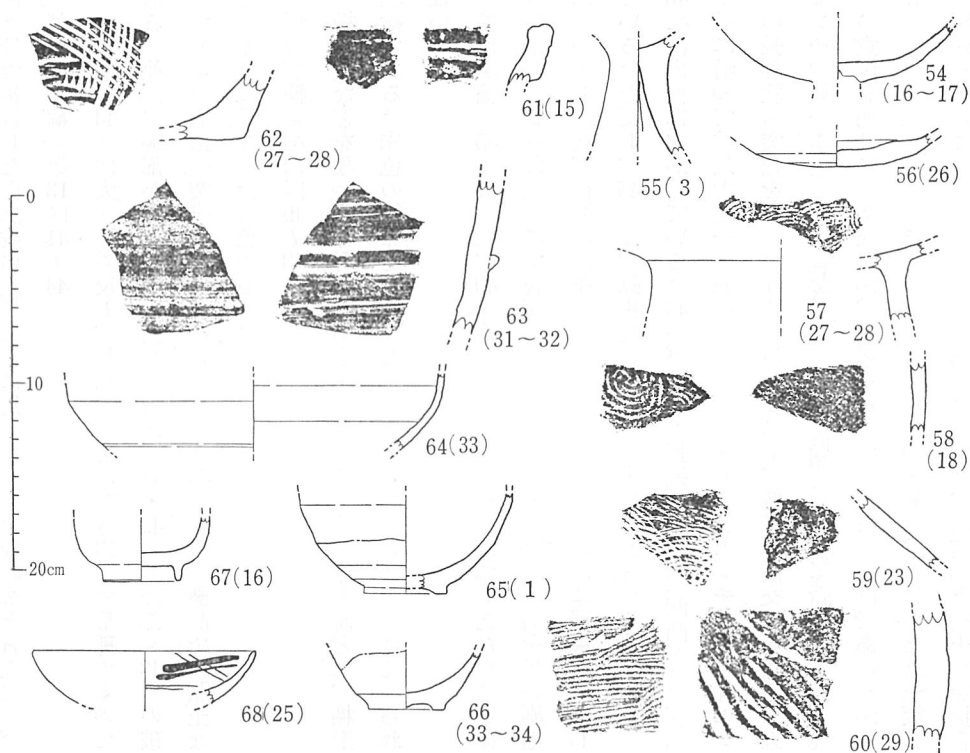
高杯などが出土している。54・55は、いずれも磨耗が著しい。55では内面に、絞り痕が認められる。その他、中近世の小皿が24トレンチから出土しているが、小片のため、図示できなかった。

土師質土器（第15図60）

厚手の製品である。外面に粗い叩き、内面に横刷毛を施している。焼であらう。

須恵器（第15図56～59）

55は、杯身か杯蓋か不明である。一応、身として図示した。底部外面



第15図 恵我藻伏岡陵の出土品(6) (1/4)

は篋削りによって仕上げているが、轆轤の回転方向は判らない。57は、器台の杯部と脚部の接合部分である。杯底部に同心円文をとどめている。58・59は甕の体部破片。58は外面に平行叩き、内面に同心円文が認められるが、その後、両面ともに、軽く撫でを加えている。59の外面は、自然釉を帯びている。

陶器 (第15図 61～64)

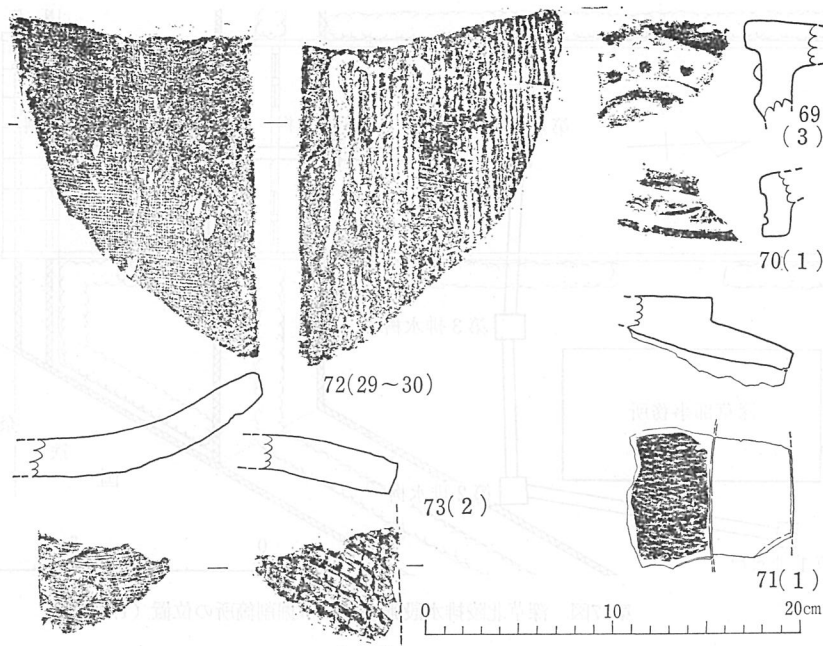
61・63は、備前焼である。61は垂直に近く立ち上がる口縁部であり、外面には、二条の凹線を繞らす。内面には、浅く繊細な卸し目が認められる。62の卸し目は、彫りが深い。63は広口壺の体部である。器壁の厚さに比して華奢な観をもつ断面三角形の突帯を伴う。突帯の上面には、灰を被っている。檜崎氏より十二世紀までさかのぼるとの指示を得た。64は灰釉鉢の体部。外面の底部に近い部分には施釉していない。

磁器 (第15図 65～68)

65・66は、唐津産の灰釉碗である。体部外面の下半は無釉である。65のほうが、体部に丸味を有す。67は京都産のいわゆる半磁器である。畳付のみ無釉である。68は、やや浅い碗である。内面に濁ったコバルト色の下絵付がある。伊万里産。その他、小片のため図示しなかったが、明代の白磁碗などがある。

瓦 (第16図 69～73)

一一五点出土しているが、鑑瓦・宇瓦は各々一点を数えるのみであ



第16図 恵我藁伏岡陵の出土品(7) (1/4)

る。焼成は、瓦質のものが多く、須恵質のものは少ない。二次焼成を被ったものも含まれている。鑑瓦(69)は、径一三センチ前後に復元できる小振りの製品である。内区に細い尾を伴う巴文を有し、外区に間隔の

あいた珠文を配す。両者の間に圈線は認められない。宇瓦(70)は、厚さ三・三センチを測る。中心飾付近の破片である。唐草文が展開している。丸瓦(71)は短く下向する玉縁を有す。筒部凸面では、縦位の縄叩きの後、同一方向に軽く撫でている。凹面には、布目痕をとどめている。平瓦には、凸面に、縄叩き(72)と粗い格子叩き(73)のものがある。量的にはほとんどが前者である。丸瓦・平瓦ともに側端面は、緩やかな角度で大きく面取られているものが多い。

(福尾正彦)

深草北陵排水設備改良工事箇所の調査

後深草天皇以下一三方を合葬する深草北陵には、深草部事務所が置かれている。その排水設備を改良して京都市の下水道に接続することになった。昭和五十七年五月十・十一日の両日、第17図に示す排水路の掘削に立会って調査した。

調査の結果、遺構は検出されず、盛土中から遊離した状態の土器片等が採集されたのみであった。予定通り、工事を行なった。

基本的な層序は次のとおりと思われる(第18図)。

- I層 表土。小砂利まじりの黒色土。
- II層 盛土。黄・黄褐または茶褐色の砂質土。一部に攪乱が入る。
- III層 旧表土。黒灰色粘土。
- IV層 自然堆積層と思われる黒灰色粘土。



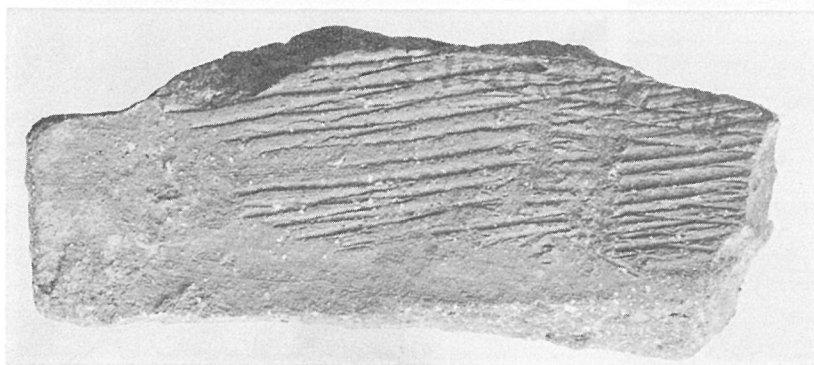
1



2

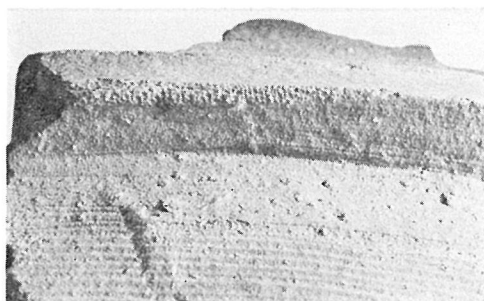


3



4

恵我藻伏岡陵出土の埴輪細部（I）（ $\times 1.2$ ）（1～3 極細横刷毛目，4 叩きの可能性のある埴輪内面）



6

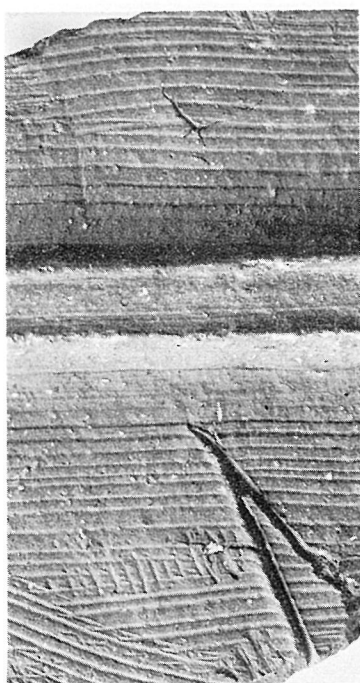


5 粘土紐の接合部分（内面）

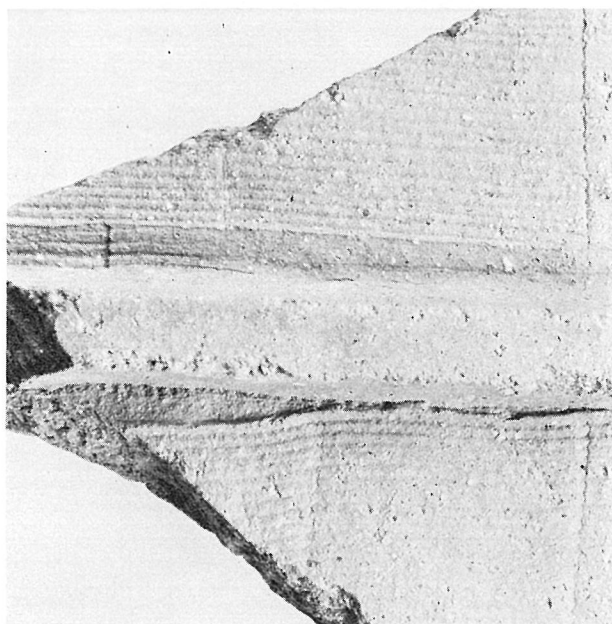


7

6・7 布目圧痕の認められる埴輪



9 横刷毛目→横撫で



8 縦刷毛目→横刷毛目→横撫で→横刷毛目

恵我藻伏岡陵出土の埴輪細部（Ⅱ）